

灰の水曜日

福音朗読 マタイ 6・1-6、16-18

2024.2.14 19:00 ミサ
カトリック高円寺教会
主任司祭 高木健次神父

今日からわたしたちは四旬節に入り、回心の季節を経て復活祭の準備をするということになります。特にこの時期に回心の必要性を意識するということですが、この時期だけということではありません。しかし、わたしたちは一年のサイクルのメリハリの中で、——いつも一本調子では、大切なことがだんだん忘れてしまうので、特に重点的にと言いましょか——回心の必要性としてその恵みを願う季節を意識して過ごす、そのように招かれていると思います。

回心というのは、なにも自分ではない誰か別の他の人になっていくということではありません。むしろ神様がお造りになった自分自身にもっともっとなっていく、あるいは神様がお造りになった自分の良さに出会っていく、そういう歩みと言うことができます。

しかし、わたしたちは罪によって本来の自分がゆがめられている、あるいは本来の自分を見ることができない、見失っていると、信仰によって現状を見るわけです。信仰がない見方ですらば、本来の自分っていうのは自分の中にある欲望に従っていくというような解釈をされることが多いと思いますが、むしろそうではない。わたしたちは、今は罪や欲望の影響によって本来の自分になれていない、ということから出発しているわけです。ですから、他の誰かになるのではないということを通して、この自分を今神様が呼んでくださったのだから自分は何も変わる必要がないんだっていう考え方もまた、キリスト教的ではないと言わなければならないわけです。

ところで、わたしたちは本来の自分に出会っていく、そのことを妨げる罪の促しと言いましょか、そこに引きずって行くものは何か。大きく分けて二つあるように思います。一つは、他の人をコントロールしたい、支配したいという、そういう支配への欲求と、それからもう一つは——相反するよう見えますけど——他の人に対する無関心です。支配欲と無関心、この二つによって、わたしたちは自分自身も恵みの源として造られた自分自身ではなくなってしまうと思います。

一方で、聖人たちの生き方を見れば、聖人たちはコントロールするならば自分自身をコントロールする。そして、無関心ということは、自分の必要に関して、自分にとっての必要性に対して無関心と言いましょか、それほどに関心を向けない。

だからこそ他の人に関心を向けることができ、そして他の人をコントロールする必要がないわけなんです。

わたしたちは自分自身をコントロールできない。欲望に振り回されているから、その現実から無意識のうちに目を逸らすために、周りの状況や他の人を知らず知らずのうちに——あるいは神様でさえも——思い通りに動かしたいという、その気持ちの方にもって行かれてしまうし、また自分自身の必要性ということに過度にずうっと頭がいっぱいなので他の人々のことが分からなくなっちゃうし、また自分の中にあるほんとは大切なものやほんとは必要なものとそれほどでもないものを見分けもつかなくなってしまうというような中で振り回されているというのが、罪や欲望に支配される人間の一つのあり方ということになります。

この四旬節の間、節制ということが言われます。節制というのは何か我慢することよりも、むしろ——英語では **temperance** (テンパランス) っていうラテン語からの難しい単語もありますけども、分かり易い英語で節制っていうときには **self-control** (セルフコントロール) って、自分をコントロールすることっていう言葉も使われることもあります——わたしたちは、自分自身のほんとの必要性はこんなに沢山なのか見分けながら、自分自身のいろんな方向から心の中で響いている欲望を断ち切る、あるいは無いものにする、それは人間として不可能であったとしても、信仰によってそれをコントロールしていく、そういう思いを、あるいはその訓練をいつも意識していく必要があるのではないかなと思います。

そのようにして、わたしたちは他の人の自由を認め、そして他の人のために心の中に場所を用意する。簡単に言えば、イエス様のように——似たものというまでにはおおげさかもしれないけれども——イエス様のように変わっていく、そして神様が一人ひとり、この世に特別な恵みをもたらすためにお造りになった特別な恵みの源として造り上げられていく父である神様の創造の御業に自分自身を委ねることができるようになる、というのではないかと思います。

わたしたちが今日これから額に受けるその灰のしるしを通して——これはひとつのしるしであります——それを受けたから急に人間が変わるわけではない、しかし、わたしたちは絶えず神様に呼ばれて、そして、神様に呼ばれたっていうしるしを心の中に刻まれている、そういう思いを目に見える回心のしるしである灰を通して思い起こしながら、この四旬節の歩みをもっともっとイエス様に出会っていくものとするように互いのために祈り合いながら、このごミサを通して恵みを頂きたいと思います。